縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係

丹羽佑一

【要約】今日の縄文時代集落論の課題として、㈠集団がどのような諸関係を持ち、どのようにしてこの諸関係が一定の関係(構造)として統合されているのか《社会組織の問題》、㈡諸関係および構造の地域性、時代性を把握するためには、どのような比較作業が可能か《社会組織比較の問題》、この二点があげられる。したがって、まず解決されなければならない問題は、集団諸関係の考古学資料における所在である。本稿では、集落空間の分割と分割構造に集団諸関係と構造の所在をみいだし、縄文時代中期の三集落遺跡を分析した。その結果、一集落空間には少なくとも三種の分割軸が存在し、それに対応して三種の関係が想定された。これらの諸関係は、「分割と結合」の側面において一つの構造を持つ。この構造は、各地域、各時代の集落遺跡から抽出された集団諸関係の比較尺度となるものである。

史林　六一巻二号　一九七八年三月

一　はじめに

本稿は、縄文時代中期の集落をとり上げ、その空間構成を分析することによって、集落を形成した集団の諸関係を抽出するものである。

集団の活動は、集落空間に限定されるものではない。それでは、何故集落空間をとりあげたのか、また分析対象は考古学資料であるが、その資料から如何にすれば集団の諸関係が抽出可能か。まずこの二点について、(a)集落空間の特性、(b)場と目的集団(考古学資料を用いて分析する際に基礎となるべき空間把握の方法)、(c)考古学資料の分析方法、の三項目を設けて

論じることにする。

（a）集落空間の特性

集落空間は、一定の景観中に、①「居を定める」という意図のもとに形成された空間である。「住む」という活動は諸活動の求心的部分に位置し、空間的にも諸活動は「住まい」を基点にして、その周囲に分散される。集落空間は、外観的にはこの諸活動の配列に「住まい」を中心にして一定の区画を設けたものである。集落空間は「住む」という活動を基点にした諸活動の分布密度の濃さによって周囲の空間から明確に区分されるのである。この点を生態系の観点において検討すると、集落空間は周囲の空間に比して人間活動の密度が最も濃く、人間以外の生物の本来的活動が極小にまで下げられている空間であり、人間がまさに主人として在る空間といえよう。すなわち、活動分布密度の濃さと活動の多様性が一定区画の中で空間的に組織されているその様式に、人間自らの諸関係が主体的に関わっている空間として集落空間は存在するのである。以上の特性から分析対象として集落空間をとりあげたのである。

（b）場と目的集団

まず従来の集落研究において集落空間の構成と集団の諸関係がどのように把握されているのかみてみよう。

(i)従来の集落研究　今日に到る集落研究の原点は、和島誠一氏の集落分析とその理解に求められる。和島氏は、横浜市南堀貝塚の分析において、②集落空間に住居址群以外に中央広場、貝塚に代表されるゴミ捨場を確認し、また自然条件を加えることによって集落の入口、海岸への降り道、舟置場、湧水地点を推定し、集落空間が各機能を持つ「場」から構成されていることを想定した。各場が総体として馬蹄形の集落形態に収束されることを明らかにし、そこに共同体規制を認め、自然条件と生産用具から導かれる生産様式と、「規制」によってその性格が規定された共同体の存在を抽出したのである。しかし、隣接集落群の問題に関しては、集落間に有機的関連を推定するにとどまっている。

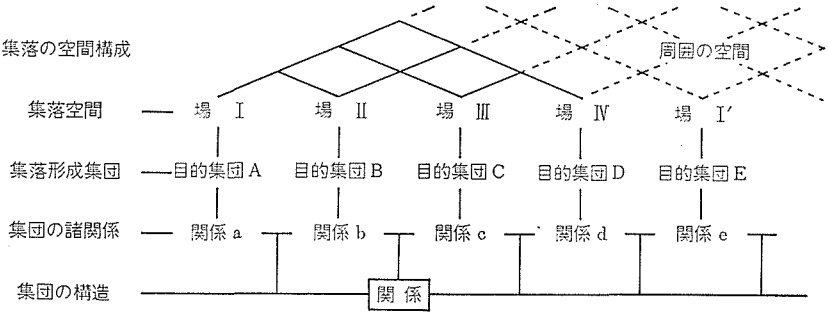
和島氏の以上の分析と理解に対し、その後の研究は、分布論③、集落形態論④、単位論⑤に分けられる。分布論は、集落の周

囲の空間を対象にしたものであり、遺跡分布にみられる共時的、通時的関連性から、遺跡群を抽出し、生産用具と自然環境から想定される生産様式を総合することによって、遺跡群と、遺跡群に対応する空間に、一定の集団と領域を想定したものである。集落形態論は、和島氏の分析を各時期、各地域の集落遺跡において検討し、確認したものである。単位論は、住居址分布の変遷から住居址群としてまとまる数種の単位を抽出し、諸単位と集落空間、領域の各場との対応関係に「規制」を認め、そこに各単位の性格と集団の構成をみいだしている。以上、集落の空間構成に焦点をあて、各集落論を検討したが、一定の成果と課題をみいだすことができる。成果として、空間構成から「規制」の存在を抽出し、「規制」によってまとまる人々――一定の集団――の存在を明確にしたことがあげられる。しかし、「規制」の分析は、社会の拘束力について語るものであって、社会がどのようなものか――集団がどのような諸関係を持ち、どのようにしてこの諸関係が一定の関係として統合されるのか――この点が課題として残されたのである。

それでは、集落の空間構成から如何にして集団の諸関係が抽出されるのか、これは空間構成をどのように理解するかによっている。次に空間構成の理解の方法について述べる。

(ii)場と目的集団(特に居住集団の諸関係の位置について)　諸活動の目的遂行のために、一定の空間には一定の機能が付与されている。以後、特定の機能を持つ空間を場とし、場には一つの活動の存在を認めることにする。[6] 一つの活動には、それにみあう集団(特定の活動遂行のための合目的集団のこと、以後目的集団とする)が存在する。したがって、一つの場には一つの目的集団が存在する。集落空間は、特定の機能を持つ種々の場より構成されている。周囲の空間もまた、集落空間に補完的な場が想定される。このことから、集落空間、周囲の空間には数種の目的集団が存在する。ところが、空間の構成とは場と場の関係総体と理解されるから、目的集団間にも一定の関係が想定される。すなわち、空間構成は目的集団の構成に変換できる(第一図)。ここにおいて、我々は集団の諸関係を空間の中にみいだし得る糸口をみつけたといえる。

よって、今糸口となるこの目的集団間の関係なるものを検討してみると、その関係は一面では生活様式に還元される。



第1図　集落の空間構成と集団の諸関係

すなわち、目的集団間の関係は、居住集団、祭礼（広場）集団、葬礼（墓域）集団、生産集団、消費集団というように、場に対応する活動のカテゴリーによって分類された集団のその間の関係として、居住、祭礼、葬礼、生産、消費という分類された活動間の関係によって表現され、その有機的関係総体は一定の生活様式を組織していることになるのである。しかし、空間構成から求めようとしているものは、活動そのものではなくて、活動主体である集団の諸関係なのである。それでは、目的集団間の関係をどのように理解すればよいのであろうか。

まず確認しなければならない点は、集落空間は場に分割され、各々に目的集団が想定されるということである。このことから、集落を形成した集団は場の数だけ分割されたといえる。[8] ところで、集団という一定の人々のまとまりには、その構成員間に一定の関係が存在する。このことを第一図のように、目的集団Aが関係a、Bが関係b、Cが関係c、Dが関係d、Eが関係eを持つというように表現すると、集落を形成した集団の構成員は、a、b、c、d、eの関係を有することになる。よって、集落を形成した集団の目的集団への分割は、集団構成員諸関係の分割に対応し、目的集団は集落を形成した集団の諸関係中の一定の関係を保持するといえるのである（第一図）。

しかし、ここで考慮しなければならない点は、目的集団の一つとしてあげた「居住集団」の内容であり、対応する場の特質である。この集団の活動目的は「住む」ということにある。この目的は、他の活動成果のもとに成立し、かつ他の活動目的に契機を与えるものである。その場は、諸活動の起点として、また結集点として在る。この

ことは、諸目的集団にとって、この場が分散起点であり、かつ結集点であることを意味する。結集した諸目的集団は、この場において「居住集団」として把握される。このように、居住集団は活動のレベルにおいて他の目的集団と位相を異にし、この性格によって規定された空間レベルにおける突出した場の主体として、明確に他の目的集団から区分されるものである。すなわち、「居住集団」は諸目的集団の共通分母として、そのまとまりとその成果を具現し、諸目的集団の母胎としての内容を与えた「集落形成集団」の実体に対置されるのである。

居住集団の活動と対応する場の特質を検討したが、諸目的集団にとって、「居住集団」と「集落形成集団」は、同一の内容を持つといえる。したがって、上述した集落の空間構成における、集落空間の場への分割↕集落形成集団の目的集団への分割↕集落形成集団の諸関係の目的集団への分割↕目的集団は集落を形成した集団の諸関係中の一定の関係を保持する、という一連の理解に対し、「集落形成集団」を「居住集団」に置換することによって、「目的集団は居住集団の諸関係中の一定の関係を保持する」という結論に到るのである。また、「集落空間の場への分割」は、「居住空間の場への分割」と構造的に同一内容を持つことがわかる。

以上の変換作業結果から、空間の構成と集団の諸関係との関係をより良く理解できる。先に、空間の構成は場と場の関係総体としたが、これは居住空間と他の場の関係として具体的に把握される。一方、集団の諸関係についてみると、目的集団は居住集団の諸関係を分割保持するが、このあり方は、居住集団が一定のまとまりを持つことによって表象されるように、分割態としてあるだけでなく、一定の結合態にまとめられる。すなわち、居住集団の諸関係を分節したものといえる。したがって、空間構成と集団の諸関係には次の関係が成立する。場の形成＝集団諸関係の分節、空間構成＝諸関係の関係＝集団構造。

以上、集落の空間構成は居住空間と他の場の関係として把握され、そこに集団構造の所在と、諸関係の分節された姿を求めることができよう。ゆえに残された作業は、考古学資料を用いて、居住空間から集団の諸関係を抽出し、かつ集落の

空間構成から諸関係の分節態を明らかにする、その方法を構築することである。

（c）考古学資料の分析方法

(i)居住空間における集団の諸関係　上述した様に居住空間は、集落の空間構成上「要」の位置にあり、集団の諸関係が集中展開している場と理解されるが、さらに重要なことは、集団が自らの存在を住居址群として大地に刻んだ空間なのである。すなわち、考古学上、集団なる一定の人々のまとまりを可視的に具体的に把握できる唯一の空間として在る。[9]

住居址群からは、通常数種の分布単位が抽出されるが、最小単位は一基の住居址であり、最大単位は全住居址のまとまりである。この最大、最小単位の間に隣接住居址群のまとまりとして把握される中間単位も知られる。[10] 居住空間は一基の住居址によって分割されるように、このような単位の存在によって幾重にも分割され、それに対応して集団も分割される。[11]

ところで、分割とは分けることであるが、その作業において一定の基準が必要である。すなわち、一定のまとまりに対して一定の基準を設け、まとまりを構成する要素の規準との関係でまとまりは分割されるのである。よって、分割された要素間には規準を媒介にして一定の関係が認められることになる。この関係を規定するものは、規準の内容に他ならない。このことから、分割された集団間には分割に対応する関係が存在する。すなわち、集団の関係はその分割によって所在が明らかにされ、分割の種類だけ抽出されるのである。したがって、居住空間の分割によって集団の関係は抽出され、その関係は住居の分布（分類基準）における空間的関係として表わされる。

しかし、我々はこれをそのまま集団の関係とするわけにはいかない。例えば、集落空間において住居群のまとまりが北部と南部にみられるとしても、北部と南部の関係がそのまま集団の関係とはいえないからである。ところが、一つの文化現象の内容は、所在によって意識の中にあるもの、行為の中にあるもの、外界の物体の中にあるもの、の三種に分けられるものと考えられているが、[12] 上述の基準は物体の中にあるものに属する。すなわち、抽出した関係は外界の物体としての姿を持つ。行為・意識としてはどのように表現されるのであろうか。考古学資料が物質である以上、集団の社会的関係等

の行為、意識の内容については間接的にしか把握されない。しかし、上述してきた集団の関係は、「分かれる」という意味において行為・意識の一部を反映しているのである。したがって、集団の諸関係は、行為・意識の領域においては分割として表現される。又諸関係の関係、すなわち集団の構造は分割構造として把握されるのである。

この様に居住空間の分割と集団の関係を捉えると、上述してきた分割は住居址群の分布による居住空間の分割、対応する集団の分割であったが、「分かれる」という意味において、各住居址構成要素[13]の形態分類、要素の有無によっても居住空間は分割される。すなわち、住居址群の分布に住居址構成要素の形態分類、要素の有無を重合することによって、分布による分割を強化したり、分布において不明確な分割を顕在化させることができるのである。以上、居住空間における集団諸関係の分析方法について検討した。しかし、問題は居住空間に分布する全ての遺構、遺物を動員したところにあろう。住居址構成要素には、祭祀、生産、消費等に関与する遺構、遺物が属し、したがって祭祀集団の関係、生産集団の関係、消費集団の関係が上述の集団諸関係の中に包摂されている。[14] しかし、このように諸目的集団の活動の一端、或いは全てが居住空間にみられるのは、居住空間の特質であり、諸目的集団の関係が居住集団の諸関係に包摂されていることは、(b)(ii)で述べたように、居住集団の諸関係を他の目的集団が分割保持していることに他ならず、全て集団の諸関係としてまとめることができるのである。ただ、遺構、遺物の属性によって諸関係の分節された在り方を明確にしなければならない。

(ii)集団諸関係の分節（居住空間と他の場との関係）　集団諸関係の分節は、上述したように居住空間における他の目的集団の活動を表象する遺物・遺構の分布によって知ることもできるが、(b)(ii)で検討したように、居住空間と他の場の関係にその所在を求めることができる。すなわち、居住空間には数種の分割軸が想定されるが、この分割軸が他の場においてどのように展開しているかを把握すればよいのである。このようにして集団諸関係の分節態、他の目的集団の諸関係が把握されるが、その集団としての実態は、各目的集団が保持する関係を函数として居住集団から導き出すことができる。

以上は、居住空間の場への分割は居住集団の他の目的集団への分割↔居住集団の諸関係の他の目的集団への分割↔他の

目的集団は居住集団の諸関係中の一定の関係を保持するという一連の理解に合致する。ただ、考古学において活動空間は、まず遺構、遺物の存在をもって把握され、空間を形成する諸場の特性は、遺物、遺構の属性によって決定される。しかし、このようにいわば直接的に把握できる場がある一方、集落外の場――生産の場等は、遺物、遺構、集落立地を総合する生活様式の一部として想定されるにすぎない。したがって、この様な場と居住空間との関係は不明であり、対応する目的集団の実態も不明といわざるを得ない。もっとも、上述したように彼らの活動目的に対応する遺物、遺構の居住空間における在り方によって、その保持する関係――諸関係の分節――を知ることもできるが、この関係は活動の一側面に対応するものであり、全てではない。

以上、考古学資料を用いて居住空間から集団の諸関係を分析する方法、集落の空間構成から諸関係の分節された姿を把握する方法について述べた。次に縄文時代中期の三集落遺跡をとりあげ、具体的に集団の諸関係について分析してみよう。なお、集団は現象的には住居址群として把握されることから、以下の記述では便宜上集団の関係を住居址群の関係として表わす。

① 人間と自然との相互作用によって得られた空間を景観とした。集落が形成される空間は、全くの自然環境として集団に対峙するものではない。集落は集団が保持する領域に形成され、領域は自然環境と隣接集落を形成する集団との関係の相互作用によって決定されるのである。従って、景観とは領域の意味に近いものであるが、概念的に領域と集落空間の境界は明確でない。ここで問題にしているのは、人間の諸活動における集落空間の位置であり、集落空間と周囲の空間の境界を明確にしなければならない。この意味において、景観を採用したのである。後述する様に、集落空間は人間の空間としてあり、自然との相互作用によってその多くが決定される景観と明確に区別されるのである。

② 和島誠一「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史』Ⅰ、一九五六年

③ 市原寿文「縄文時代の共同体をめぐって」『考古学研究』第六巻第一号　一九五九年　鎌木義昌・高橋護「縄文文化の発展と地域性　瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ　一九六五年　二四五―二四八頁　杉原荘介・戸沢充則「縄文時代の社会と生活」『市川市史』第一巻　一九七一年　二八五―二九九頁

④ 麻生優「縄文時代後期の集落」『考古学研究』第七巻第二号　一九六〇年　後藤和民「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』第二七号　一九七〇年　六八―七一頁、一〇八頁

⑤ 水野正好「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化』第二一巻三・四号　一九六九年　菅原正明「縄文時代の集落」『考古学研究』第一九巻第二号　一九七四年

⑥　一つの場が他の場に変移する場合がある。この場合、場に対応する空間には二つ以上の活動が認められる。空間構成は時間の組織化に対応する。

⑦　墓域に於いて二つの集団が存在する。生者と死者である。墓域は集団にとって、まさに鏡の様なものであるが、ここにいう目的集団は死者を指す。

⑧　しかし、かりに祭祀集団と生産集団を例にあげると、両集団は別個に存在するものではなく、両者は一致するか、一方に包摂されるか、或いは互いにその一部を形成するか、いずれかである。したがって、集落を形成した集団は、目的集団の総和ではない。この集落を形成した集団と目的集団の関係を、集団の構成員についてみると、彼らは数種（全てではない）の目的集団に重複して属しているといえよう。以降、この目的集団が保持する関係について述べるが、目的集団は、集落形成集団の諸関係から抽出された特定の関係によってまとまる人々なのである。

⑨　墓域において、集団は人骨群としてより具体的に把握できる。墓域では被葬集団の葬制上の関係だけでなく、遺骸に残された生前の活動の表象や痕跡（歯牙変形、骨、歯の消耗度）によって、他の目的集団の関係も抽出できる。しかし、後述する様な居住空間の在り方と異なって、他の目的集団の活動との重複が少ない為、集団諸関係の分節や、分節された関係によって他の目的集団の実体を被葬集団から抽出することは困難である。集団のまとまりを把握する際の墓域集団の戦術的な弱点は、人骨の残存度が環境によって左右されること、例え人骨が遺存しなくともその墓制が明らかであればよいが、いま対象とする縄文時代中期の資料では不明な場合が多いことから増幅される。なお、抜歯から集団の諸関係を抽出したものに、鈴木尚『骨』一九六〇年　六七頁　春成秀爾「抜歯の意義」一、二『考古学研究』第二〇巻第二、三号　一九七四年がある。

⑩　戸沢充則「海戸遺跡における集落（住居址群）の構成」『海戸』第二次調査報告書　長野県考古学会　一九六八年　一〇二―一〇八頁　水野正好注⑤　菅原正明注⑤の分析や、各集落遺跡の報告において、常に住居址群分析の焦点となっている。

⑪　居住空間の最小の分割は、一住居内空間の分割である。一住居が保有する空間は、住居の戸口によって二様相を呈する。すなわち、開口によって全居住空間と連関を持つ空間単位として在り、閉口によって他の居住空間とは隔絶した空間として在る。上述してきた一住居址による居住空間の分割は、前者の側面において住居内空間をとらえたものである。今問題にしている住居内空間の分割は、一般的に間取りとして把握されるが、後者の側面における住居内空間の構成である。したがって、居住空間の分割と一住居内空間の分割を連続的に捉えることはできない。すなわち、住居内空間の分割は居住空間の最小の分割ではあるが、分割された集団間の関係は、全住居址のまとまりを最大単位としたところの最小単位間の関係ではないといえる。もっとも、複数の住居に分かれていた、あるいは分かれるべき集団が一住居を構える場合は別である。本稿においては、この住居内空間の分割は扱わない。間取りを明確に指摘できる住居址が、分析対象とした遺跡になかったからである。住居の戸口は居住空間の構成において重要であるが、位置決定に不明確な点が残り、また不明な住居址群が多数にのぼるので、これも扱わなかった。なお、間取りと社会組織の関係について、大林太良「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』二-二　一九七一年　四七―五五頁の分析がある。

⑫　石田英一郎『文化人類学入門』一九七六年　七一―七四頁

⑬　住居址構成要素は、屋根、柱、壁体、周溝、床等住居そのものを構成する要素、ならびに、炉、石壇、埋甕、土器、石器等住居内諸活動

に伴う道具、設備、すなわち、住居址で検出された遺物、遺構の全てである。これらの形態分類および有無によって、住居址群は分類される。

⑭ 住居址内で検出された遺物、遺構の全てが活動時の状態を保持しているとは限らない。住居の廃絶のし方（居住終焉に伴う住居内活動のあり方）によって、遺物、遺構の活動時のあり方が全く失なわれてしまったり、変形されたりする。従って、遺物、遺構の残存状態から抽出された関係を、本来的な活動に伴う目的集団の関係に同定する場合、変形の度合を知らなければならない。ここに、住居の廃絶のし方を分析する必要が生じるのである。或いは、各住居址の残存状態の比較によって住居址群の分類も可能である。ここから集団の関係が抽出される。この関係は、集団の住居廃絶活動に於ける関係として把握されるが、この作業を通じて廃絶のし方を分析することも可能であろう。なお、住居の廃絶に後続して住居の再利用が行われる。住居の廃絶とその後の活動の分析は、土器廃棄パターン研究にみられる。可児通宏「住居の廃絶と土器の廃棄」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』V 多摩ニュータウン遺跡調査会 一九六九年 二七―三一頁 原嘉藤他「長野県塩尻市小丸山遺跡緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』八 一九七〇年 四一―四二、五一頁 樋口昇一「土器廃棄に関する一問題」『信濃』第二四巻第一二号 一九七二年 小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』九三 一九七四年 永峯光一他『貫井南』小金井市貫井南遺跡調査会 一九七四年 五一―六一頁 桐原健「床面浮上土器の取扱いについて」『信濃』第二八巻第八号 一九七六年

二 集落遺跡の分析

（a） 高根木戸遺跡（千葉県船橋市習志野）①

船橋市域を北から南に流れる海老川の一支流によって高郷と呼ばれる台地が形成されている。本遺跡は、この台地の舌状に突出した部分に立地する。台地の平均標高二七米、水田面との比高一五米を計る。なお、当台地は支谷の谷頭に隣接し、海老川支流の最奥部に位置する。

本遺跡において、阿玉台式期から加曽利EⅢ式期にわたる竪穴住居址群②、勝坂式期から加曽利EⅢ式期にわたる小竪穴群、加曽利EⅠ式期に属する人骨群③、加曽利EⅠ式期から加曽利EⅢ式期にわたる貝ブロックが検出されているが、各々は総体として台地縁辺に沿いつつ内部に向かい、中央空白部（以後、広場と称する）の周りを円弧状に巡っている。各期の分布とその変遷を分析し、居住空間の形成過程を明らかにすることによって、主体である居住集団の諸関係を抽出しよう。

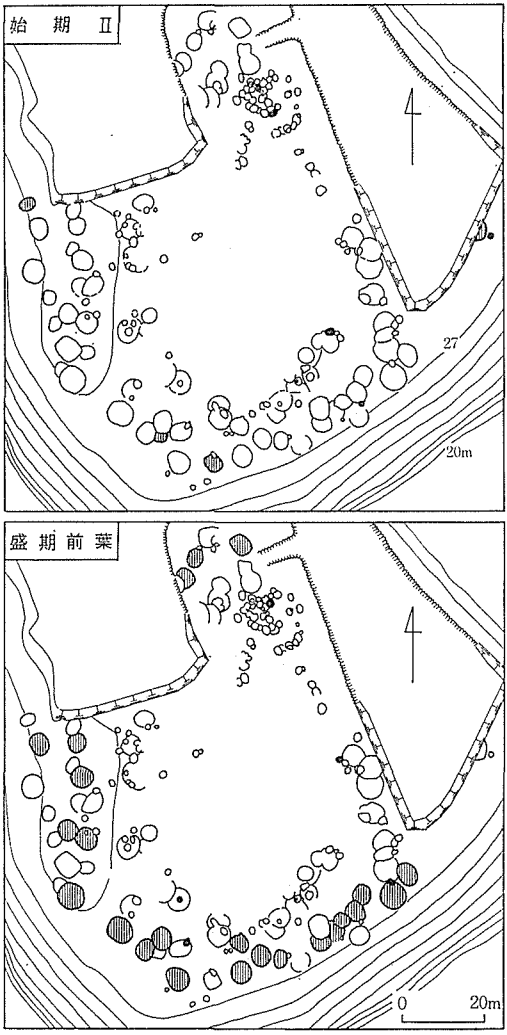
(i)住居址群の分布

住居址群の各期に於ける分布とその変遷をみると（第二・三図）、居住空間の形成において次の点が注目される。

(イ)住居址群は円弧状の配列をみせ、歴史総体として外側から内側へ移動するが、始期Ⅱを除く各期に複数の円弧として把握される住居址群の配列がみられる。

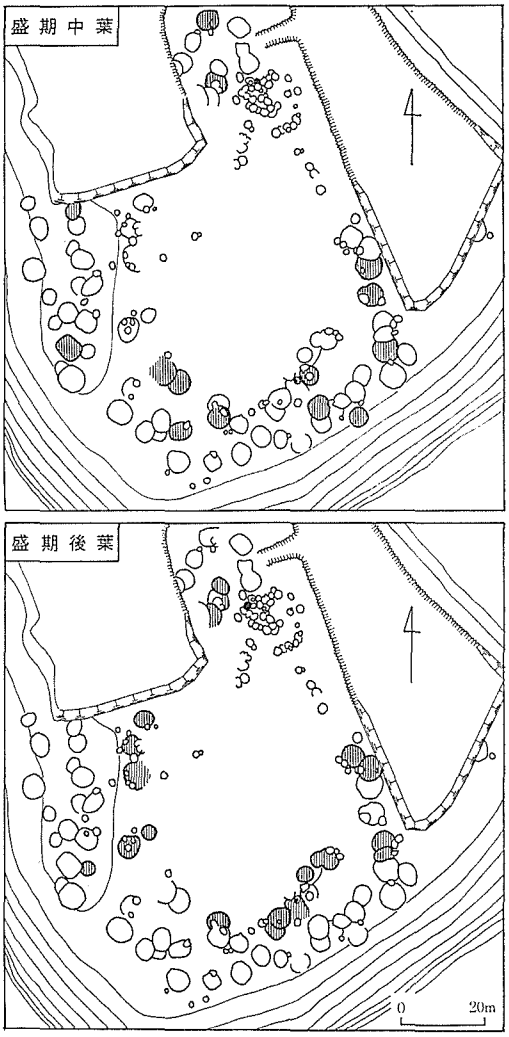
(ロ)台地南側の住居址群において、各期内の建替え④から想定される隣接住居址群の居住空間の場の巾（円弧上の巾）は、内に移動しても狭くならない。

(ハ)西部の住居址群と南部の住居址群の間隔が後葉において拡がる。



第2図　高根木戸遺跡・住居址分布の変遷①

（黒円は小竪穴を示す）

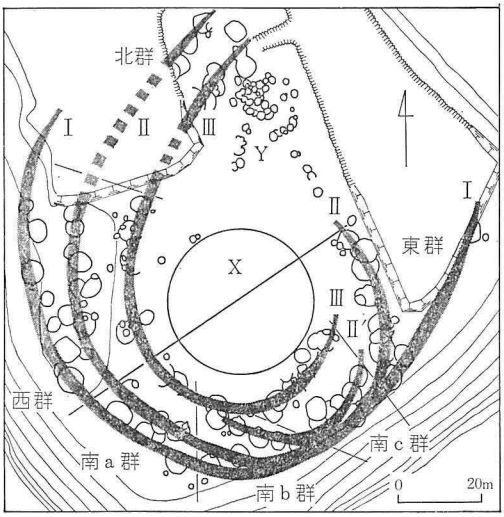


第3図　高根木戸遺跡・住居址分布の変遷 ②

(二)東南部の住居址群の移動が、台地縁辺に併行するのでなく、住居址群全体からみると円弧を描く様に内へ彎入する。

(ホ)西部の住居址群は、他の住居址群と比較して、移動に特異性がある。以上、五点が居住空間の形成に関して注目される。各問題点について検討してみよう。

(イ)盛期前葉、中葉、後葉において、居住空間に複数の住居の配列がある現象は、一つには住居址群の歴史総体に流れとしての内への移動があるところから、各期間中に外から内への移動があったということを示しているともいえる。南部、北部の住居址群にはこのことが対応しよう。しかし、南部と東南部、南部と西部の住居址群間には移動は考えられない。この場合はどのように理解すべきであろうか。



第4図　高根木戸遺跡・住居址群の円弧状配列

時期		前葉				中葉				後葉			
配置		I	II	II′	III	I	II	II′	III	I	II	II′	III
住居址群	北群		●		●		●		●				●
	西群	●	●			●	●				●		●
	南a群	●	●				●		●				
	南b群		●	●					●				●
	南c群			●		●		●	●				●
	東群	●					●				●		

第5図　高根木戸遺跡・住居址群配列の変遷

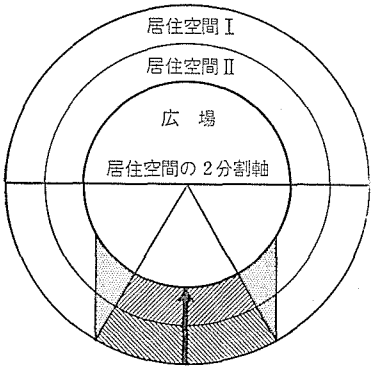
古い円弧の配列に従う住居址と、新しい円弧を主体的に構築する住居址が存在する。住居址の分布をみると、隣接住居址が円弧状の配列において同一経歴を持ち、特徴ある群を形成していることがわかる。すなわち、第五図のように住居址群を群別でき、各住居址の居住空間形成における上述した対応関係は、この群の関係であるといえる。

以上、始期IIを除く各期の複数円弧状配列の存在は、居住空間形成に対する各群の役割の差異に由来するものといえる。このことから、本遺跡の居住空間が各群によって分割されていることがわかるのである。しかし、東群を除く各群が最終的には円弧IIIに統一されるのに対し、何故東群は従来の円弧に従い、最終的円弧IIIに列することがなかったのであろうか。

今、個々の住居址の各期の動きに注目すると、円弧上を移動している。南部、東南部において顕著である。そこで、全住居址と円弧の関係をみると、第四図の様に四本の円弧が想定できる。[5] 始期IIを除く各期に複数の円弧が存在する。すなわち、前葉に円弧I、II、II′、III、中葉に円弧I、II、II′、III、後葉に円弧II、IIIが存在する。これらの円弧群の関係は新旧の要素を持つものである。各住居址に属す円弧に注目すれば、各期には、

この現象は、上述の理由からは説明できない。次に設定した(ロ)の問題は、この点について検討を行なったものである。

(ロ)南c群に対応する居住空間の円弧上の巾は、内への移動に際し減少することはない。本遺跡では広場を中心にしてその周囲を居住空間が巡っているが、この居住空間は上述した様に隣接住居址群のまとまりによって分割されている。この集落空間の構成に対し一つのモデルを想定すると、第六図になる。このモデルでは、居住空間の分割軸が広場の中心から放射状に出ている。したがって、居住空間が内へ移動する場合、各群に対応する居住空間の円弧上の巾が減少する。そうでなければ、群間の居住空間が重複し、空間構成が崩壊する。しかし、巾が減少しなくとも(分割軸が広場の中心から出ない場合)、居住空間が重層化[6]すると、重複は免がれ、各群の居住空間が確保される。本遺跡の居住空間の変遷は、この場合に対応する。すなわち、南c群の居住空間の巾が減少しなかったこと、南c群と東群の間に円弧状配列の重層化がみられたことが、それを示しているのである。また、ここに、東群が最終的円弧Ⅲに列しなかった原因を求めることができる。



第６図　空間構成モデル

以上から、居住空間の構成において、本遺跡居住空間の各群に対応する分割軸が広場の中心から出ず、したがって広場を分割することもなく、単に各群に対応して設定されていたといえよう。[7] しかし、重層化に言及するならば、東群居住空間の重層化は、避けえたはずである。すなわち、北へ居住空間を拡大すればよいのである。ところが現実にはなされなかった。北に明確なる居住空間の境界が想定されるのである。この境界は、第六図における居住空間の二分割軸に対応するものであるが、この点については、(ハ)、(ニ)で検討する。

(ハ)西部の住居址群と南部の住居址群の間隔が後葉において拡がる現象は、南a群の本集落からの離脱によってもたらされたものである。南b群の内への移動、それに対応する南a群自身の移動から居住空間が狭められ、さらに西群と

重層できなかったことによって南a群は居住空間を喪失し、離脱に到ったといえる。西群居住空間との分割軸が、重層化を許さない程明確に設定されていることは、注目すべきである。すなわち、この分割軸の性格は、重層化のみられる群間（東群と南c群）の居住空間分割軸と異なっているといえよう。これに関連して、先に東群居住空間北部の境界が明確なことを指摘したが、東群と南a群が共に「南側居住空間」の端部に位置することは、「北側居住空間」と「南側居住空間」の間に明確なる境界が存在したことを示すものである（第四図）。

(二)東群が台地縁辺に沿わず彎入する現象は、「南側居住空間」の端部に位置することと、住居址群全体の円弧状の配列に対応したこと、この二点がもたらしたといえる。なお、東群居住空間の北端部の境界は、中葉から後葉にかけての、また後葉内での住居址の建替えにみられるように、明確に設定されていたといえよう。

(ii)西群の移動の特異性は、(イ)でみたように、居住空間形成における受動性として把握されるが、これはその立地空間によってもたらされたものといえる。西群の居住空間は、周囲に対し若干高くなっており（始期Ⅱ～後葉の一時期）、この微地形的空間の特徴[8]が、居住空間形成における枠組となることにより、全体の居住空間形成において、西群に受動的立場をとらせたものといえよう。

以上、住居址群の分布とその変遷から、居住空間の構成を分析した。次に小竪穴群、貝ブロックの分布を観察し、居住空間との関係を分析してみよう。

(ii) 小竪穴群[9]の分布と広場空間の形成　小竪穴群の分布をみると、居住空間との関係から、小竪穴群は二類に分けられる。一類＝住居と場を共有しない群（北部にまとまって分布する）、二類＝住居と場を共有する小竪穴群、である。これらの構築過程を検討すると、共に始期Ⅰから始まり、住居群の構築より一時期早い。また、居住空間が外側から内側へ移されるのに対し、小竪穴群一類は当初から居住空間内限の内側に、二類の一部は当初から居住空間の内限に構築されている[10]。すなわち、小竪穴群二類の一部は、あらかじめ居住予定空間に設けられ、その内限は居住空間の内限と一致するのである。

以上の小竪穴群構築過程から、居住空間の内側への移動限界が当初より定められていたことがわかるのである。また、このことは、居住空間の内側への移動と関係なく、広場の範囲が当初より定められていたこと、すなわち、広場が不変のものとして在ったことを示しているといえよう。以上、我々は、小竪穴群の構築過程から広場の形成を知ることができた。なお、小竪穴群一類は居住空間の内側に位置することから、広場に属するものである。それでは、(i)で分析した居住空間の構成と広場は、どの様な関係を持つのであろうか。次に分析してみよう。

本遺跡の広場は、上述したところから第四図のX空間とY空間に求められる。X空間は遺構のみられない空間であり、Y空間は小竪穴群一類の構築された空間である。このように広場は、性格の異なる二つの空間（場）に分離される。今、X空間と居住空間の関係をみると、(i)で明らかな様に、西群と南a群との境界と東群居住空間の北の境界によって居住空間は南北に二分割されるが、この二つの境界を結ぶ分割軸は、X空間をも南北に二分割する。一方、居住空間は隣接住居址群のまとまりによっても分割された。しかし、(i)(ロ)で明らかなように、この分割軸は広場を分割するものではない。すなわち、居住空間の構成と広場の構成を比較すると、居住空間の二つの分割軸は異なる内容を持つことがわかる。

次に、居住空間とY空間の関係をみると、Y空間が居住空間に対して一つのまとまりを持つものであるが、その偏在性から、北群居住空間との密接な結びつきが想定される。

(iii)貝ブロックの分布　貝ブロックは、居住空間か、その外側に分布している。これは、貝の投棄が廃絶した住居に行われるからである。この投棄された住居址（投棄空間）と居住空間の関係をみると、各群の居住空間には対応する投棄空間がある様にみえるが、これは盛期前葉の状況である。他の時期では、一、二の群の居住空間に対応するだけであり、それが特定群の居住空間ということでもない。居住空間の構成に対する投棄空間の関係は不明といわざるをえない。

以上、高根木戸遺跡における集落の空間構成について、居住空間を中心に分析した。その結果、居住空間には少なくとも三種類の分割軸の存在することがわかった。一つは各住居址間に存在するもの、残り二つは共に隣接する住居址群のま

とまり間に存在するものであるが、広場の分割軸との関係によって、異なるものであることがわかった。この差異は次のように表わせる。一つは、住居址群、広場を南北に二分割する軸であり、いま一つは、この二分割された各群を細分割する軸⑪である。後者は広場を分割しない。分割軸には一定の関係が対応するところから、居住集団は少なくとも三種類の関係を持っていたといえる。

（b）鶴川J地点遺跡（東京都町田市）⑫

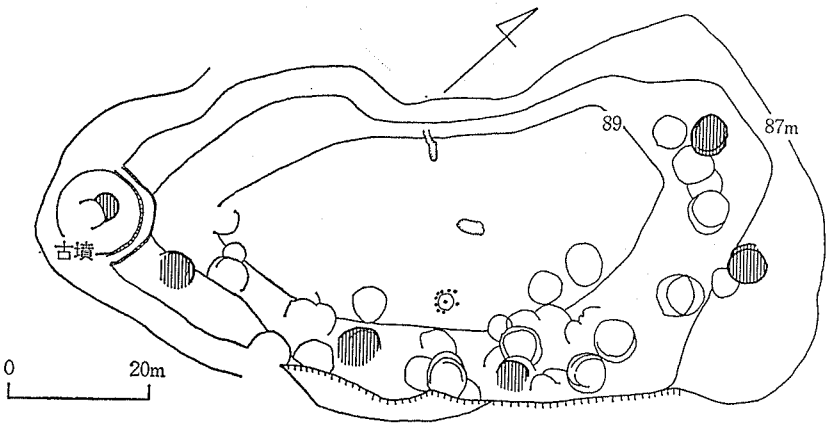
多摩丘陵の南部、鶴見川上流の開析谷によって南を、真光寺の支流による小支谷によって北を各々限られた東西に長い丘陵のピーク、標高八九・九米の山頂部に本遺跡は位置する。この山頂部は、南北に長軸をとる楕円形の平坦面を持ち、東西を小谷によって限られている。なお、西側の谷頭部に湧泉がある。

この山頂部平坦面に勝坂末期から加曽利E末期にわたって住居址群が形成されている。住居址群は、台地の北側から東、南、南西へと台地縁辺を巡って弧状に並ぶ。台地西側と中央部（以後広場と称する）には、住居址群はみられない。この配列は長期間にわたった住居址群構築の結果である。上述した高根木戸遺跡では、集落の空間構成に多くの問題点が存在した。本遺跡の空間構成にどの様に対応するのか、この点を考慮しつつ、各期の分布とその変遷を追うことにしよう。

(i)住居址群の分布

(イ)勝坂末期の分布（第七図）　六基の存在をみるが、台地の外縁部に位置することや、以降の住居址分布に比較して、住居址間の間隔の広いことが注目される。集落形成初期の住居址群が以降の居住空間の外縁部に位置することは、高根木戸遺跡と同様である。

(ロ)加曽利EⅠ式期の分布（第八図）　住居址群の本格的形成がみられる。勝坂末期との関係をみると、全体として内へ移動するが、以前の居住空間と重複した、或いは極めて近寄った空間に構築空間が設けられる場合（A類）と、以前の居住空間と離れて構築空間が設けられる場合（B類）の二つに、当期の居住空間の形成が分かれる。A類、B類の差異は隣接住居

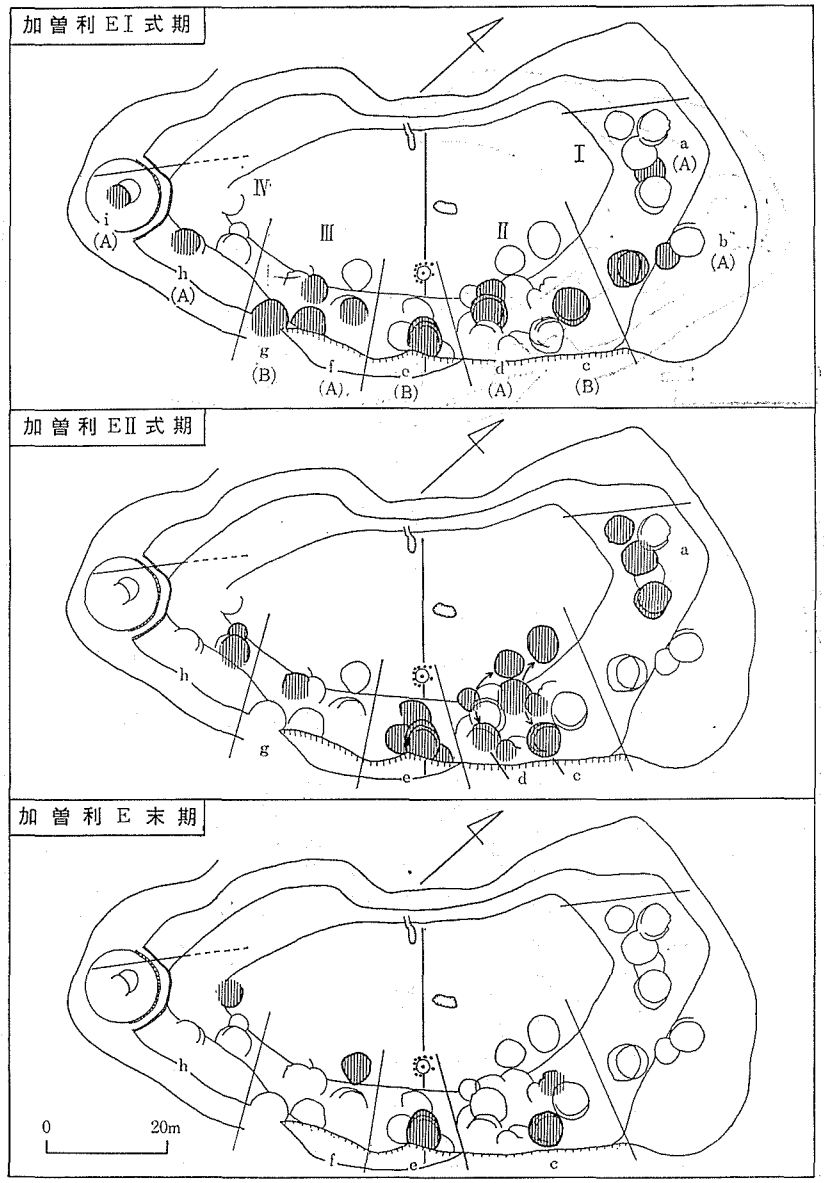


第7図　鶴川J地点遺跡・勝坂末期住居址分布図

址間において、以前の住居址との系譜の差異として把握される。よって、当期の各住居址を群として捉えられよう。すなわち、a～i群の存在が認められ、各々対応した居住空間が設定できる（a～i空間）。A類にa、b、d、f、h、i群が、B類にc、e、g群が各々属する。今、各群の分布をみると、居住空間の両端部は共にA類の群によって、中央部はA類とB類の群が交互に分布しているのがわかる。すなわち、各群の系譜の差異と配列に一定の関係が存在する様である。

(ハ)加曽利EⅡ式期の分布（第八図）　当期の住居址群をみると、b、f、i空間の住居址が存在しない。この内i空間の住居址は、古墳築造による削平によって消滅した可能性もあるとされている。一方、a、c、d、e、g、h空間に住居址をみるが、c、d、e群には拡張、重複が多くみられ、g、h群と対照的である。住居址群全体からみれば、東側住居址群と西側住居址群の差となり、以前の東西の相同的な在り方から変化している。この変化が空間構成上の変化かどうか、各住居址群の動きをみてみよう。

当期に属する住居址は、さらに編年区分可能であり⑬、c、d群は、居住空間中、いったん内縁へ向かった後外縁へと移動した事がわかる。その内縁における位置をみると、住居址群全体の弧状配列から離脱するが、一転して外に向かい従来の居住空間に復帰する。これは、当期に空間構成の変化がなかったことを示している。



第8図　鶴川J地点遺跡・住居址群分布の変遷（e群内縁部に位置するのは竪穴状遺構である）

このc、d群の動きは、後述するe群の動きと共に、変化の否定という消極的側面ではなく、従来の居住空間の構成を明確にするという積極的側面を持つ。すなわち、c、d群の動きをみると、二基の住居址が呼応して移動していることがわかる。これは、c、d群が一つにまとまる群であることを示しているといえよう。この群と居住空間の関係をみると、その移動範囲は従来のb群とc群の境界、d群とe群の境界内である。これは、他群との居住空間の境界が当初より明確に定められていたことを示すものである。さらに二基が同一歩調でこの境界内をいわば左右に移動することは、一基に対応する居住空間が、それ自身によって定められたものでなく、対となる一基との関係で定められたことを示している。これは二基よりなる群のまとまりの強さを示すものである。また、重要な点は、この群の当初に定められた居住空間の巾が、内縁部においても減少しないことである。高根木戸遺跡の隣接住居址群のまとまりと同一のものか不明であるが、この群に対する境界もまた、広場の中心から出ているとはいえない。広場を分割することはないといえよう。

次にe群をみると、c、d群に比較して、居住空間がかなり限定されている。これは、e群が居住空間の中心に位置していることに関連するものである。e群の内縁部に特異な竪穴が位置することも、e群の特殊性（中心性）を物語っている。以上、当期において、c、d群が一つの群としてまとまりを持つこと、e群が居住空間の中心に位置することが明らかとなった。

この結果を加曽利EⅠ式期に遡ってみると、住居址群はe群を中心として系譜類型の同じ群が対称的に並んでいることがわかる。しかし、各群の居住空間は、c、d群でみられた様に隣接する群の関係によって規定されるものであるから、この対称的な配列は、隣接する群のまとまりにおいてみるのが適切である。よって、そのまとまりを検討すると、Ⅰ群（a・b群）、Ⅱ群（c・d群）、Ⅲ群（f・g群）、Ⅳ群（h・i群）の成立をみる。[14] Ⅰ群とⅣ群、Ⅱ群とⅢ群は、各群を形成する住居址の系譜の組み合わせにおいて同一内容を持ち（Ⅰ群とⅣ群は〔A・A類〕、Ⅱ群とⅢ群は〔A・B類〕）、その配列にあって、e群を中心に対称的な位置をとる。すなわち、加曽利EⅠ式期の住居址群の系譜の差異と配列の関係は、以上の

ような住居址群の有機的関係を示すものであったといえよう。

また、e群と竪穴址を結ぶ線分を広場に延長すると、広場、居住空間は二分割される。よって、本遺跡住居址群は東西に大きく二分割され、かつ隣接する二基の住居址群によって各々はさらに二分される一方、その対称的な配列によって一つにまとまる存在であるといえよう。この住居址群、広場の二分割軸は、高根木戸遺跡でみられるものと同一である。

(二)加曽利E末期の分布（第八図）当期の住居址群をみると、東、西に若干観察できる程度であり、集落の末期を端的に表現している。住居址群の減少は、Ⅰ群と、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ各群を構成する二基の住居址群の内の一基が欠落したことによる。二基のまとまりが、集落の末期に於いて分解したことは、本遺跡の勝坂末期の住居址分布や、次にみる初山遺跡の集落形成期初頭の状況を導くものである。さて、当期の住居址群の大勢は、その位置を居住空間の内縁にとる。c群は居住空間の中位に位置するが、c群居住空間の内縁は、前期の逸脱行為によって生じたものであり、全体の配列に於いて居住空間の内縁に位置する。しかし、e群は当初の位置を厳守し、その特異性を明らかにしている。このように、本遺跡住居址群は歴史総体において外縁から内縁へ進み終焉する。この在り方は、高根木戸遺跡と同様のものである。しかし、e群住居址のような存在は高根木戸遺跡ではみられないものであった。

以上、住居址群の分布、その変遷から居住空間の構成を分析した。次に遺物の分布について検討してみよう。

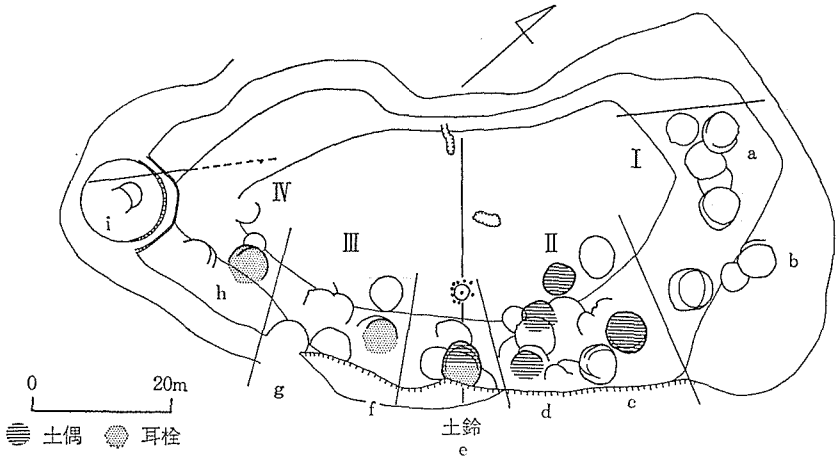
(ii)遺物の分布（第九図）

(イ)土偶の分布　c、d、e群に分布する。

(ロ)耳栓の分布　e、f、h群に分布する。

(ハ)土鈴の分布　e群に分布する。

土偶、耳栓の分布をみると、各々は東側住居址群（土偶）か、西側住居址群（耳栓）に限られている。ところが、e群には双方が出土している。一方、土鈴という特殊な遺物がe群に限って出土している。以上の遺物分布から、e群は東西住居



第9図　鶴川J地点遺跡・遺物分布図

址群双方に共通項を持ち、すなわち関与し、かつ独立した存在といえる。[15] 中心に位置するというe群の分布とまさに対応するのである。

以上、鶴川J地点遺跡における集落の空間構成について、居住空間を中心に分析した。高根木戸遺跡と同様の空間構成を展開するものの、e群、中央竪穴址の存在、e群を中心とした住居址群の対称的な配列は、高根木戸遺跡ではみられなかったものである。この点については、次にみる初山遺跡に顕著である。

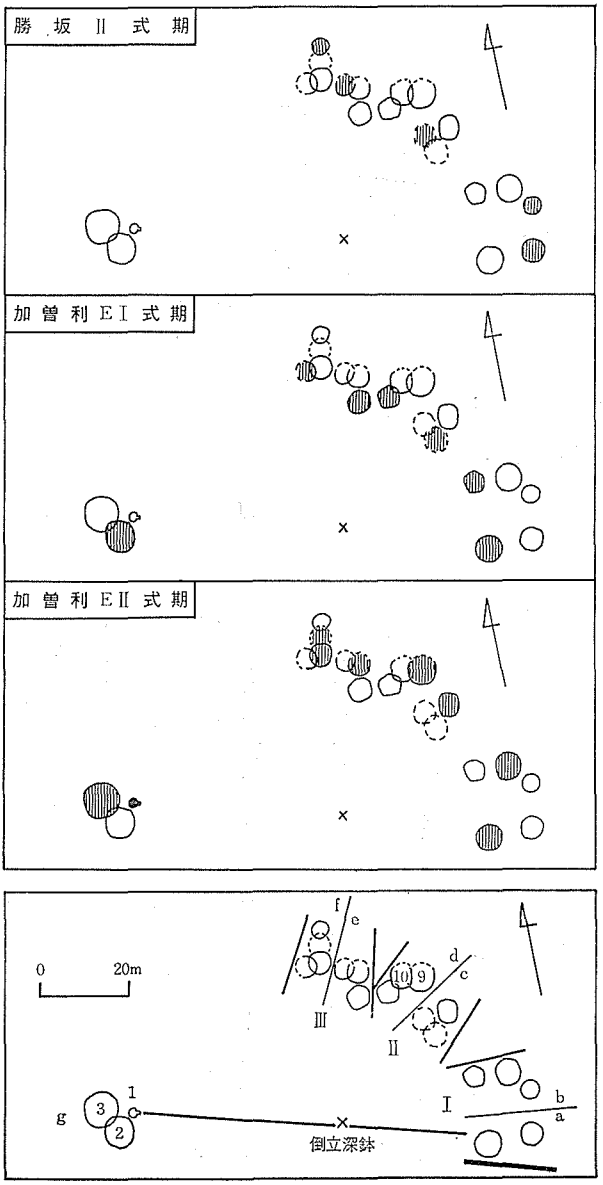
（c）初山遺跡（川崎市向ヶ丘）[16]

多摩川南岸を東西に走る丘陵には、それより派生した多くの台地をみるが、本遺跡は北に派生した台地上に立地する。台地は東西巾一〇〇米で南北に細長く、南に丘陵の尾根が続く。遺跡標高約八八米を計る。

二一基の住居址が、この台地平坦部に検出されている。その分布を観察すると、倒立深鉢一個をみる中央空間（以後広場と称する）を巡って、東側に一八基の住居址が弧状に並び、西側に三基の住居址が群在する。これらの住居址群は、勝坂Ⅱ式、加曽利EⅠ式、EⅡ式、EⅢ式期の四期に編年区分されている。各期の分布とその変遷を分析し、居住空間の形成過程を明らかにすることによって、主体である居住集団の諸関係を抽出しよう。

(i)住居址群の分布

各期の分布とその変遷を観察すると(第一〇図)、各住居址の一連の建替え作業から、居住空間はa～g空間に分割される。この居住空間は一基の住居址に対応するものである。各居住空間の住居址に注目すると、a、b、e、f空間の住居構築は、広場に対し外縁から始まり内縁へ、再び外縁へ移動して終わる。一方、c、d、g空間のそれは、内縁から始まり外縁へ移動する。g空間ではさらに一転して内縁に移動して終わる。全体として広場の周囲を弧状に巡る住居址群も、



第10図　初山遺跡・住居址群分布の変遷

各住居址に設定された空間に於いて異なる動きを示すのである。この様な住居址群の動きを足掛りにして本遺跡の空間構成を検討すると、次の諸点が明らかとなる。

事象＼住居址群		Ⅰ a	Ⅰ b	Ⅱ c	Ⅱ d	Ⅲ e	Ⅲ f	g	備考
経歴	初現時期	○	○	○	●	○	○	●	勝坂Ⅱ式期○ 加曽利EⅠ式期●
	建替え	○	○	●	●	○	○	●	外→内→外○ 内→外(→内)●
	初期の建直し	●	○	●	○	○	●	○	有● 無○
遺構・遺物	埋甕	●	○	●	●	○	●	○	有● 無○
	石棒	○	○	○	○	○	●	○	有● 無○
	有孔大珠	○	○	○	●	○	○	○	有● 無○
	有孔鍔付土器	○	○	○	○	○	○	●	有● 無○

第11図　初山遺跡・住居址群の配列と諸関係

(イ)住居址群の経歴その動きの差異が示す住居址間の関係は、設定された居住空間の有機的関係に対応する。

d、g空間の住居址（以後d群、g群と称する。同様に各空間に対応する住居址も空間名によって表わす—図一〇、図一一）は、他の住居址群より一時期遅れて、加曽利EⅠ式期に初現をみ、かつ当初より内縁に位置する。残りのa、b、c、e、f群は勝坂Ⅱ式期から始まるが、c群は当初より内縁に位置し、外縁から始まるa、b、e、f群と異なる。以上の各群の差異を構築された居住空間との関係でみると、c・d群は東側居住空間中真中に位置し、g群は独り西側に位置する。一方、一つにまとまるa、b、e、f群は、c・d群を中心にして、a・b群とe・f群のまとまりに二分されている。移動の異なる群（a・b群、c・d群、e・f群）が交互に並び、住居址群は三群に分かれるのである。移動の差異と空間の差異との対応が一応みいだされる。しかし、この配列はよく見るとおかしい。東側住居址群は移動の差異によって大きく二群に分かれるのに対し、空間的には三群に分かれる。何故c・d群は配列の端部にこなかったのであろうか。

今、集落形成期の住居址をみると、a、c、f群の住居址は建直しがみられ、b、e群にはみられない。この差異を居住空間との関係でみると、c・d群

を中心にして両脇の住居址群中、遠いものは建直しがみられ、近いものにはみられない。c・d群を中心にして同一内容を持つ群（a・b群、e・f群）が対称的に分布しているのである。配列における対称性は、この住居址群が一つのまとまりとして在ることを示す。c・d群が端部に行かず中心にきた理由は、ここにある。すなわち、c・d群の位置は、住居址群の三分割と、分割された住居址群の結合に規定されたものといえよう。移動の差異による住居址群の二分割は、住居址群の配列との関係でみると、三分割された住居址群の結合を示すものであったといえる。

以上、住居址群の移動と空間の矛盾について分析した。その結果、住居址群は二つの関係を持つことが明らかとなった。すなわち、住居址群の三分割に関する関係と、その結合に関する関係である。それでは、この二つの関係の所在は何処に求められるのであろうか。前者は明らかである。三群間の分割軸上にある。後者の関係は、c・d群の位置、a・b群とe・f群の対称性↓配列（中心と両端）＝居住空間の三分割に表象される。すなわち、この関係も又三群間の分割軸上にある。この結合と分割の所在に於ける重複が、上述の矛盾をもたらしたといえるのである。住居址の経歴、その動きの差異が示す住居址間の関係は、各々に伴う居住空間の有機的関係（配列）に対応しているといえよう。ここにいう住居址間の関係の一つは、a・b群―c・d群―e・f群、各群間に想定される関係であり（分割に関する関係）、各群は二基の住居址から成立するところから、隣接する二基の住居址群間の関係といえよう。今一つは、住居址群の結合に関する関係である。この関係については、(ハ)で論ずる。なお、以降の分析において、a・b群をⅠ群、c・d群をⅡ群、e・f群をⅢ群とし、対応する居住空間をⅠ、Ⅱ、Ⅲ空間とする。

(ロ)広場、居住空間の範囲と住居址群の配列は、当初より定められていた。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ空間の外縁は、広場を巡る同一円弧上に在り、Ⅰ、Ⅲ空間で観察されるように、この外縁は当初の住居構築によって形成されたものである。このことから居住空間の外縁は、当初より定められていたといえる。一方内縁は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ空間の内縁が同一円弧上に在り、Ⅱ空間の内縁は当初の住居構築によって形成されたものであることから、外縁同

様当初から定められていたといえる。さらに、居住空間の内縁が当初より定められており、以降の住居がそれより内に侵入せず、逆に内から外への動きをみせることは、広場の範囲が当初より決定され、しかも不可侵の場であったことを物語っているといえよう。なお、広場の西側に位置するg群住居址の動きは、東側住居址群の動きに対応するところから（共に外縁へ向かう）、広場の中心も又設定されていた可能性がある。すなわち、広場に於ける空間構成の不変性である。

以上は、居住空間範囲の内外の境界について分析したものである。次に居住空間の両側縁の設定、ならびに配列について分析してみよう。

上述したように集落形成期の住居址群には、建直しがみられる住居址とみられない住居址が在る。各々の分布をみると、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ空間には必らず建直しがみられる住居址が在り、しかも全居住空間の両側縁と中心に位置する。建直しのみられる住居址は他の住居址に比較してその存続期間が長かったものと推定されることや、住居址群が以降引き続いて構築されたことから、集落形成期初頭には建直しがみられる住居址しか存在しなかったといえる。以上の集落形成期の住居址群の状況から、居住空間の両側縁と中心、すなわち居住空間の両側縁によって区画される範囲と住居址群の配列は、当初より定められていたといえよう。後続集団は、あらかじめ設定された空間に入り込めば良かったということになる。

(ハ)広場の分割軸が想定されるが、これはⅠ、Ⅱ、Ⅲ、g空間の分割軸に対応するものでなく、居住空間全体に対応するものである。

上述したようにⅠ～Ⅲ空間には各々二基の住居址が存在するが、その内↕外の移動をみると、同一歩調をとりつつ内に向かうに従って二基間の間隔は広くなる。一基の住居が保有する居住空間が二基の住居址群のまとまりによって規定されることは、鶴川J地点遺跡と同様であり、又、二基の住居址群が保有する居住空間の変化は、高根木戸遺跡の場合と類似する。よって、Ⅰ～Ⅲ空間の間の分割軸は、広場を分割することはないといえよう。

それでは、本遺跡の広場に分割軸は存在しなかったのであろうか。そこで、g群一号址の張り出し部と居住空間の南端

部を結んだ線分を想定すると、[17]広場の倒立深鉢がこの線分にのることがわかる。すなわち、この線分に一定の意味を想定することができるのである（第一〇図）。次に、この線分によって画された広場と居住空間の関係をみると、広場は半円となり、その周囲を居住空間が巡っていることがわかる。ところが、高根木戸、鶴川J地点遺跡では、住居址群は円形の広場を巡り、相対峙する住居址群間に引かれた線分によって居住空間、広場は二分割されている。このことから、二分割された各居住空間には半分の広場、すなわち半円の広場空間が対応することになる。以上にみられる空間構成から、本遺跡の居住空間は、高根木戸、鶴川J地点遺跡の二分割された一方の居住空間に、想定線分は広場の二分割軸に各々対応するといえよう。すなわち、本遺跡の広場には一本の分割軸が存在する。

さらに、この分割軸の存在（広場の半円性）から、本遺跡住居址群には相対峙する今一つの住居址群の存在が認められるのである。[18]この住居址群の存在故に本遺跡住居群は半円を分割することなく、一つとしてまとまるのである。すでに明らかなように、(イ)で分析した住居址群結合に関する関係は、この相対峙する住居址群間の関係に同定されるのである。この関係は、住居址群を大きく二分割する関係であるが、重要なことは、二分割された群の三小分割がそれによって結合されるということである。すなわち、上位の分割関係は、下位分割の結合関係に変換できるということである。[19]

以上、住居址群の分布とその変遷より、集落の空間構成を分析し、居住集団の諸関係を検討した。次に、遺物の分布がどのように対応するか分析してみよう。

(ii)遺物の分布（第一〇図・一一図）

(イ)埋甕の分布　埋甕の分布をみると、c、d群間に分割軸が想定される。すなわち、この軸によって埋甕の配列に対称性を見い出すことができるのである。この対称性は、住居址群を二分割し、かつ結合する。よって、ここに住居址群の新たな分割軸が設定できるともいえる。しかし、隣接する二基の住居址間における埋甕の分布をみると、共に埋甕を持つ群（Ⅱ群）、一方が埋甕を持つ群（Ⅰ・Ⅲ群）と住居址群は二分割され、かつ各群の配列によって住居址群は三分割される。こ

れは、すでにみた住居址群の構成と同じである。この様に、埋甕の分布から二つの住居址群の構成を知ることができる。この二つは重複して存在したものであろうか。

今、Ⅱ群を中心にⅠ、Ⅲ群の埋甕の配列をみると、そこに対称性が見い出される。これは、上述した集落形成期初頭の建直しの有無にみられた住居址群の構成と同一のものである。又、住居址の初現時期、建替え、埋甕の分布、有孔大珠の分布と住居址群の三分割の関係をみると、常にⅠ、Ⅲ群は同一の内容を持ち、Ⅱ群だけが異なる。すなわち、住居址群はⅠ・Ⅲ群とⅡ群に分かれ、かつ配列によって三群に分かれるのである。以上に於ける住居址群の構成に対し、c—d群間の分割軸は有機的な関係を持たない。従って、この分割軸は存在の可能性が少ないといえよう。

しかし、上述の住居址群の構成において、何故Ⅱ群は常に他群と異なるのであろうか。或いは、その特異性を導くものは何か、それは、多くはd群の特異性によるのである。図一一で明らかなように、住居址群の初現時期、埋甕を持つ群と集落形成期初頭の建直しのあった群との有機的関係、有孔大珠の分布に於いて、Ⅱ群を他のⅠ、Ⅲ群から区分するのは、d群の特異性なのである。よって、Ⅱ群の特異性の分析は、d群の特異性の分析によって置き換えることができよう。次項は、この特異性について分析したものである。

(ロ)有孔大珠・有孔鍔付土器の分布　有孔大珠はd群一〇号址（覆土）[24]、有孔鍔付土器はg群三号址から出土している。これらの出土は、その属性から両群の特異性を示すものであるが、他の住居址群に対して特異であるという点において、両群の密接さを示すものである。すなわち、共に加曽利EⅠ式期に始まること、d群九号址の炉石はg群一号址の炉石に利用された可能性があること、[25]この二点が示す両群の密接さを補強するものである。

今、両群の分布をみると、d群は東側居住空間の中心に在り、g群は広場、居住空間の二分割軸の起点に在る。この分割軸は、いわば集落空間の中心軸であり、g群は中心軸の起点に位置するといえる。すなわち、両群は、分布においても他群に比して密接な関係を持つのである。この密接さは何を物語るものであろうか。

広場、居住空間の二分割軸をみると、この分割軸は、本遺跡住居址群に相対峙する今一つの群の存在を想定させるものであった。各群は半円の広場空間を保有する。ところが、この分割軸は、広場、居住空間を半分に分割すると同時に半分の広場、居住空間の結合軸でもある。したがって、広場の二分割軸上にてこの二群は結合するといえる。すなわち、この分割軸の起点に位置するg群は、両群の結合の表象として在ったといえよう。一方、第一一図で明らかな様に、Ⅱ群の特異性は住居址群の対称性を生み出し、その特異性はd群の特異性によって導かれたものであった。このことから、d群の特異性は本遺跡住居址群の結合の表象として在ったことが知られるのである。すなわち、g群が分割された対群との結合の表象であり、そこに各群のまとまりが想定されること、d群が本遺跡住居址群の結合を表象するものとして在ったこと、以上がd群とg群の密接なつながりをもたらしたのである。d群、g群の特異性、その密接なつながりは、本遺跡住居址群の結合と、さらに対群との結合によって規定されたものであるといえよう。

以上、有孔大珠、有孔鍔付土器の分布を、住居址群の構成から検討し、d群、g群の特異性の由来するところを分析した。g群は、その分布から集会所的な性格をもっているとされているが、[22]東側住居址群が二基からなる住居址群のまとまりを形成するのに対し、常に一基から成立する。この点もg群住居址が他の住居址と異なる性格を持つことの証左となろう。

(ハ)石棒の分布　f群から二点出土している。第一一図で明らかな様に、a群とf群は同一の内容を持ち、Ⅱ群を中心にして対称的な分布を展開するが、石棒出土の有無によってその差異は明らかである。よって、石棒にみる住居址群の配列は、Ⅱ群を中心にして両脇にⅠ、Ⅲ群が存在するものではなく、石棒を起点にすると、Ⅲ→Ⅱ→Ⅰ群の方向性を示すのである。Ⅱ群を中心とした配列には、Ⅰ、Ⅱ群の対称性から、住居址群の結合が認められた。すなわち、本遺跡住居址群に想定された対群に対し、一つのまとまりとしての存在をこの配列は示す。分割である。一方、石棒にみられる配列には群としてのまとまりは認められない。すなわち、この配列には対群との結合が想定される。石棒のこの出土状況は長野県茅野市与助尾根遺跡と同様である。[23]

以上、本遺跡の空間構成を分析し、居住集団の諸関係を抽出した。住居址群は三種の分割軸を持つことが明らかとなった。すなわち、本遺跡住居址群に相対峙する今一つの住居址群間、隣接する二基の住居址群間、二基の住居址間に各々存在する。したがって、居住集団はこの三種の分割軸に対応する三種の関係を持つといえる。また、本遺跡では、この分割軸間に一定の関係が認められた。すなわち、分割軸には分割と結合の関係が認められるが、上位の分割軸に於ける分割は、下位の分割軸における結合に変換できる「関係」である。

① 八幡一郎編『高根木戸』船橋市教育委員会　高根木戸遺跡調査団　一九七一年　自然環境の記述は本書によった。また、本稿の住居址分布変遷図は本書を参考にした。

② 本遺跡の住居址群は始期Ⅱ、盛期前葉、中葉、後葉の四期に編年されている。各々阿玉台式、加曽利EⅠ、EⅡ、EⅢ式各期に対応する。八幡一郎編注①　一九七一年

③ 時期的に限定されていること（盛期前葉）から本稿では扱わなかった。

④ 住居址の検出状態をみると、二基以上の住居址が重複している場合がある。新しい住居址が古い住居址のプラン（保有面積）を全面的に再使用する場合（床は一般的に貼床する、プランは拡大される場合が多い）と、新たなプランを採用する場合がある。前者を建直し、後者を建替えと呼ぶことにする。住居址重複現象の変遷をたどると、一住居に対応する居住空間が把握され、住居の系譜が抽出される。又、隣接する住居址群の分布変遷をたどれば、重複関係にない住居址間にその系譜を求める事もできるが、分布の変遷パターンが問題となる。この場合も建替えと呼ぶ。建替え、建直しについて、水野正好「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化』第二一巻三・四号　一九六九年　四―七頁　宮坂光昭「縄文中期集落復元の基礎的検討」『信濃』第二三巻第四号　一九七一年の分析がある。

⑤ 円弧Ⅱは、南部住居址群の移動に注目して想定したものである。

⑥ 東群と南。群の居住空間の関係を指す。広場からみて、各群に対応する居住空間が重複している様子をいう。

⑦ 各群に対応する居住空間の円弧上の巾が定められていたことは、重層化によって想定される。

⑧ 貝の花遺跡（八幡一郎編著『貝の花貝塚』東京教育大学文学部史学方法論教室一九七三年）中期の住居址群は南北二群に分割され、本格的集落形成がみられる中期のⅡ期には全体として円弧状の配列を展開するが、Ⅰ期の南群の配列は、全体の円弧に従わず、むしろ立地する微地形（現在の等高線によって推定される）に従っている。このことは、微地形的特徴が、群としての個別性の表象としてあったこと、本格的集落形成に際して、群としての個別性が、住居址群のまとまりによって弱められたことを物語るものである。

⑨ 小竪穴は一般的に土壙と呼ばれているものに対応するが、報告書の命名によった。小竪穴の用途には諸説があるが（墓壙、落し穴、貯蔵穴等）、本遺跡では貯蔵穴としての用途が想定されている。なお、土壙の一部は倒木痕であるという見解もあるが（能登健「発掘調査と遺跡の考察」『信濃』第二六巻第三号　一九七四年　六七―七五頁）、

本遺跡では不明である。本稿では人工のものとして、その構築過程を問題にした。倒木説は、各集落遺跡で明確に指摘されれば、集落空間の形成上興味ある問題を展開しよう。

⑩ 居住空間の内限に始期Ⅰ、Ⅱの小竪穴がみられる。又、時期は不明であるが、盛期後葉の住居址の床が、小竪穴を覆っている場合がある。

⑪ この分割軸は、北～東群の各住居址群間に想定されるものであるが、全てが同一種類に属するものかどうか不明である。各群の内容（共時態として推定される戸数）が不明であり、各群が同様の住居址群単位であるといえないからである。

⑫ 大場磐雄・永峯光一・小出義治編「鶴川J地点」『鶴川遺跡群』鶴川遺跡調査団　一九七二年　自然環境の記述は本書によった。

⑬ 大場磐雄他編注⑫　四二―四四頁、七六―七七頁　加曽利EⅡ式期で、建替えを行なったc、d、e群において、居住空間の外縁に近い住居址から新しい要素をもった土器が出土している。

⑭ Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ群の勝坂末期から加曽利EⅠ式期への移行における動き、或いは加曽利EⅠ式期の動きをみると、Ⅱ群と同様に隣接する二基の住居址は同一歩調をとり、Ⅰ～Ⅳ各群は、群としてのまとまりを持つことがわかる。また、以降で述べる住居址群の有機的配列も、この点を積極的に示すものである。各群は、水野正好注④　四―一二頁の中で分析された隣接住居址群のまとまり‖二棟一小群に対応するものである。

⑮ e群は他の住居址群（a～i群）と異なって、終始対となる群を持たない。この点もその特殊性に対応するものである。その分布に於いて異なるものの、後述する初山遺跡西側住居址群と同一の内容を持つ。

⑯ 渡辺誠『川崎市初山遺跡第三次調査概報』一九七一年　自然環境の記述は本書によった。

⑰ 居住空間の南端部を形成するa群住居址（勝坂Ⅱ式期～加曽利EⅡ式期）とg群一号址（加曽利EⅢ式期）は時間的にズレがあり、この線分は想定不可能と考えられるかもしれない。しかしg群一号址はg群の一員として在ることより、一号址の張り出し部が示す住居の方向性は、g群の性格を端的に表現するものとして理解され、よってg群一号址とa群間に線分が想定されるのである。また、この線分が、居住空間の内縁によって設定された内外の関係に於ける広場の境界に対して、広場の今一つの境界に対応することは明らかである。

⑱ 初山遺跡住居址群の在り方は、貝の花遺跡後期前半の住居址群に対応する。すなわち、貝の花遺跡中期後半の住居址群は南北二群構成であったが、後期前半に到って、南群が隣接する栗カ沢遺跡を形成し、貝の花遺跡は北群の末裔による一群構成となるのである。一方、貝の花遺跡が南群栗カ沢遺跡集団の墓地として在ったことの可能性が指摘されていることや、広場が中期後半同様に保たれていること（もっとも住居址群には広場の半分が対応するが）は、両群のつながりが維持されている事を示している。貝の花遺跡後期前半の住居址群の動向、墓地の在り方については、関根孝夫「集落」『貝の花貝塚』東京教育大学文学部史学方法論教室　一九七三年　五六七―五七六頁の分析による。

⑲ 大分割、小分割の差異を、上、下のレベル差に置き換えた。このことは、(i)(イ)において分析した住居址群の配列が分割より結合を重視している、すなわち小分割より大分割が重視されているところからいえよう。

⑳ 覆土からの出土であって、一〇号構成員との直接的関係は無い様に思われる。しかし、その出土はd空間であり、有孔大珠とd群住居址との結びつきが想定されるのである。

㉑ 渡辺誠注⑯　三―四頁

㉒ 渡辺誠注⑯　三頁

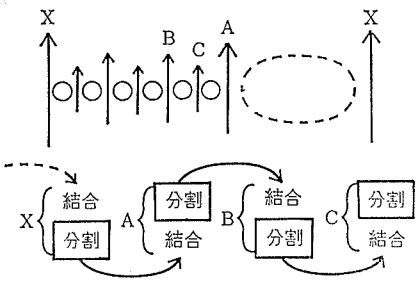
㉓ 与助尾根遺跡（宮坂英弐「与助尾根遺跡の発掘調査」『尖石』茅野町教育委員会 一九五七年）の住居址群は東西に二分割されるが（水野正好注④ 一〇―一一頁）各群の端部を形成する住居址に石棒が出土している。大林太良氏の分析によれば（大林太良「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』二の二 一九七一年 六〇～六二頁）、石棒は集落の内、外界の接点にあるとしている。すなわち、住居址群両端における石棒の出土は、集落空間の完結性と、二群に分割される住居址群が一つのまとまりとしてあることを示している。これに対し、初山遺跡の石棒の出土状況は、与助尾根遺跡に於ける二分割された一方の群の石棒の出土に対応するのである。さらに、集落空間についてみると、本遺跡空間は完結していないといえる。仮に対群の存在を本台地に求めると、住居址群の南端に続くものと推定されるが、現状は、集落空間の内・外の関係が具体的条件（自然条件―台地上）によって規定されるものでなく、集団の関係によって規定されることを考慮させるものである。

三 集落の空間構成と集団の諸関係

高根木戸、鶴川J地点、初山の三集落遺跡において、居住空間を中心に集落の空間構成を分析し、集団の諸関係を抽出した。その結果を要約する。

(a) 住居址群の分割（第一二図）

住居址群は三種の有機的な分割軸を持つことがわかった。各々をA、B、C分割軸とすると、A分割軸は住居址群を大きく二分割するものである。B分割軸はA分割軸によって分けられた各群をさらに分割するものであり、鶴川J地点、初山両遺跡では隣接する二基の住居址のまとまりに分割する。高根木戸遺跡では、隣接する住居址はまとまるものの、その内容（住居址数）は不明である。C分割軸はB分割軸によって形成された各群をさらに分割するものであり、鶴川J地点、初山両遺跡では隣接する二住居址間分割軸である。高根木戸遺跡では不明である。以上の三分割軸は、各々の所在において異なり、かつ集落の空間構成から、A分割軸とB、C分割軸に二分される。A分割軸は広場を二分割するが、B、C分割軸は広場の分割軸とはならない。この様に三分割軸は明確に区分されるものである。



第12図　集団の諸関係と構造（初山遺跡より）

（b）分割軸に対応する集団の諸関係とその構造

分割軸には一定の関係が対応する。よって集団は三種類の関係を持つといえる。A分割軸にAの関係、B分割軸にBの関係、C分割軸にCの関係を設定する。ところが、初山遺跡では一つの分割軸に二種の関係が重複した。すなわち、A分割軸における分割はB分割軸によって形成された各群を結合するものであったが、その内容を第一二図の様に表わすことができる。各関係を連結する線分は、上位分割に於ける分割が下位分割に於ける結合に置換できることを表現している。この変換関係は、Aの関係とBの関係が、又Bの関係とCの関係が、「結合と分割」の関係に在るということを示している。初山遺跡における二種の関係の重複現象は、この関係を示しているのである。これは「結合と分割」の側面に於ける集団諸関係の構造である。なお、第一二図のXの関係は、本稿では扱わなかったが、隣接集落の住居址群との分割軸に対応する関係である。[1] この様に、各関係は「結合と分割」の関係に体系づけられるが、これは各関係の「分ける」という機能による必然的結果である。

（c）集団諸関係の分節

第二章では居住空間における遺物、遺構の分布、集落の空間構成から分析された諸関係を全て集団の諸関係としてまとめ、遺物、遺構の属性、場の属性から想定される個別目的集団の諸関係を検討しなかったが、ここで要約しておこう。

三集落遺跡における広場集団はX、Aの関係を持つ。鶴川J地点遺跡土偶祭祀[2]集団はXの関係（e群の出土）、Aの関係（東群の出土—西群にみない）、Bの関係（Ⅱ群の出土—東群Ⅰ群にみない）を持つ。同遺跡耳栓集団はXの関係（e群の出土）、Aの関係（西群の出土—東群にみない）、Cの関係（Ⅲf、Ⅳh群の出土—二基の住居址群の内、一基に出土をみ、今一基にみない）を持つ。同遺跡土鈴集団はXの関係（e群の出土）を持つ。初山遺跡埋甕集団はAの関係（d群の出土—居住空間における配列）、

Cの関係（Ⅰa、Ⅲf群の出土―二基の住居址群の内、一基に出土をみ、今一基にみない）を持つ。同遺跡有孔鍔付土器集団はXの関係（g群の出土）を持つ。同遺跡有孔大珠集団はAの関係（d群の出土）を持つ。同遺跡石棒祭祀集団はXの関係（f群の出土―居住空間における配列）を持つ。

なお、上記各関係は分割を意味し、結合の関係ではない。また、本稿では高根木戸遺跡の貝ブロック以外、生産、消費を直接的に示す遺物、遺構は扱わなかった。高根木戸遺跡の貝ブロックにおける集団の関係は不明である。

(d) 集落空間の形成と放棄（文化の技術的限界と集団の構造）

㈢集落の形成から放棄の過程を観察した結果、居住空間の形成による空間構成の破壊が二遺跡でみられた。

空間構成は次のように表わされる。(イ)広場の範囲は当初より設定され、不変である。(ロ)居住空間は広場の周囲を円環状に巡るが、居住空間を二分割する境界は広場も二分割し、かつ侵されることはない。(ハ)隣接住居址群に設定された居住空間は、定められた範囲を持ち、他群との境界は広場を分割しない。(ニ)居住空間の内限は当初より設定されており、外限もまた、多くは自然条件の制約より設定されている。

この空間構成に対し、住居址群はまず空間の明確なる境界（台地縁辺部）に構築され、後内部に移される。したがって、居住空間の生産は、集落空間の形成期に完了し、以後は一方的な消費によって空間は消滅する。もっとも、住居址群の外から内への動きに対し、内から外への動きによって居住空間の消極的再生産もみられる。

この居住空間の形成過程において、住居址群の配列（空間構成）が崩壊するのである。高根木戸、鶴川J地点遺跡（Ⅰ群とⅡ群の配列）では、居住空間の「重層化」として現われる。これは、上述の空間構成における(ロ)(ハ)の矛盾として把握される。

居住空間の形成から消滅の過程は、縄文時代文化の技術的限界（台地突端部に集落を形成する、縁辺部にまず居住空間を設定する、竪穴住居址である）によって規定されたものである。一方、居住空間の形成によってもたらされた空間構成の矛盾(ロ)

(ハ)は、集団諸関係の分割軸における所在から、Aの関係とBの関係間におこったものといえる。すなわち、居住空間の確保として表わされる集団の存続(技術的限界によって成立)は、空間構成として表わされる集団構造の諸関係間に不安定な要因をもたらすのである。文化の技術的限界に対する集団構造の持つ矛盾である。

① 初山遺跡と隣接集落住居址群との分割軸には、A分割軸が対応するが、X分割軸はそれより上位の分割軸を意味する。

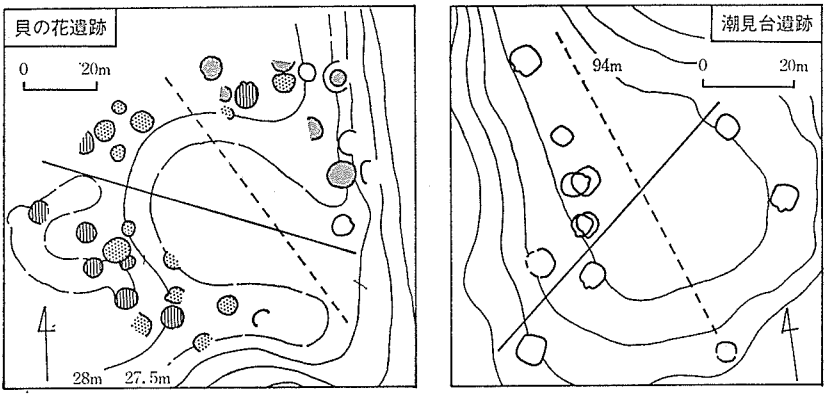
② 土偶は廃棄された状態で出土しているが、土偶の製作から廃棄の全過程に土偶祭式の展開を想定した。土偶は殆んどが壊れた状態で出土すること、埋納(与助尾根遺跡では土器の中に首部が納められており、また後・晩期東北地方の例であるが、埋納されたような状態で検出されている)されたような状態で出土することは、土偶の廃棄に祭式の展開を想定させるものである。なお、同じく廃棄された状態で出土している鶴川J地点遺跡耳栓、初山遺跡有孔鍔付土器、有孔大珠に目的集団を想定したが、彼らの活動はいずれも廃棄活動に限定して想定したものである。土偶の出土状態に関して、野口義麿「土偶・土版」『日本原始美術2』一九六四年を参照した。

四 おわりに

以上、集団の諸関係に対する集落空間構成のあり方から、集団の諸関係を抽出する方法論を構築し、三集落遺跡を具体的に分析した。その結果から今後の課題を検討する。

(a) 住居址群の分割(特殊な住居址群の問題)

住居址群の分割軸と広場の関係において、初山、鶴川J地点両遺跡ではB分割軸は広場を分割しなかったが、貝の花遺跡(千葉県松戸市)①中期後半の住居址群、潮見台遺跡(神奈川県川崎市)②中期後半の住居址群においては、B分割軸の一つが広場を二分割する(第一三図)。ところが、この分割軸は住居址群を対称的(量的に)に二分割しないという点において、A分割軸と異なる。いわば、見かけの二分割軸と称すべきものであるが、この分割軸で他の住居址群と画された隣接する二基の住居址群(貝の花遺跡は検討を要する)は、他の隣接する二基の住居址群とは異なる内容を持つことが想定される。鶴川J地点遺跡のⅡ群、初山遺跡のⅡ群に対応するものである。



第13図　見かけの二分割軸（点線で示す。実線はA分割軸）

しかし、他の住居址群に対し特異である点で一致するこれら各群も、他の住居址群に対する関与のし方によって異なることが推定される。貝の花、潮見台両遺跡では分割軸の在り方から、他の住居址群全体に関与するようであり、鶴川J地点、初山両遺跡では二分割された一方の群への関与が指摘される。この差異は、或いは二群の結合を表象する「集会所」と呼ばれる様な特異な構築物（鶴川J地点遺跡e群、初山遺跡g群）の有無によるものと考えられる。以上、縄文時代中期後半の特殊な住居址群について述べたが、住居址群の諸関係上の位置によって二種に分けられる。貝の花、潮見台両遺跡の特殊住居址群はXの関係（見かけの広場二分割軸に所在）、鶴川J地点、初山両遺跡特殊住居址群はAの関係（B分割軸に所在）を持つ。

四遺跡は時期を同じくし、初山遺跡と潮見台遺跡は地域も同じくしている。また、四遺跡はA、B、C三関係による「結合と分割」の構造を持つ。このことから、縄文時代中期後半の集団の生活様式にバラエティーがあり、しかも、そのバラエティーを超えて同一の集団構造の存在したことがわかるのである。さらに重要なことは、鶴川J地点、初山両遺跡において、この種の住居址群の存在が、集団の諸関係に付加すべき関係をもつのではなく、諸関係の補完的役割を荷っていることである。

また、貝の花、潮見台両遺跡において、特殊な住居址群の他の住居址群に対する差異性は、集落空間の直径的分割によって示されるが、同心円分割によっ

て示すものとして、[3]後期の大湯遺跡[4]（秋田県鹿角郡大湯町）における野中堂、万座両環状組石群が在る。両環状組石群は、内帯と外帯から形成されている。住居址群と組石群は異なるものの、構造上、数量上、内帯は中期の特殊な住居址群に対応するものであり、しかも、その形態の明確さから、定式化された在り方が推定されるのである。しかし、中期の特殊な住居址群は二種あり、そのいずれに対応するものか、大湯遺跡を形成した集団の諸関係が明確でない現在、不明である。中期におけるバラエティが、後期以降どの様に展開されるのか、中期の集団構造の持つ問題を知る上にも、縄文時代文化の動向を知る上にも重要な課題とされるのである。

（b）集団構造の比較、および諸関係の復原

第三章(b)において、A、B、C三関係は、「結合と分割」の側面において一つの構造を持つことが、明らかであるが、この構造を使って各遺跡を比較できる。すなわち、住居址分布、動きが示す分布指向性、遺物の分布状況によって、各分割軸の有無、明確さ（強、弱）が決定されるが、この作業から各分割軸に対応する関係の集団における比重が把握され、[5]この結果を比較すればよいのである。例えば、鶴川J地点遺跡東群（Ⅰ、Ⅱ群）は、X＝A≧B＞C、西群（Ⅲ、Ⅳ群）は、X＝A＞B＜C、初山遺跡は、X＝A＞B＜C、高根木戸遺跡北、西群は、X＝A、南a、b、c、東群は、X＝A＞B?と表わせよう。今後、資料を拡大することによって、集団諸関係および構造の地域性、時代性が把握できよう。

このように各関係は「結合と分割」によって一つの構造を形成するが、各関係を集団の具体的な諸関係に復原する為には、新たな作業を必要とする。すなわち、民族学資料との構造的比較である。民族学資料の構造的分析によって得られた集団の構造と、考古学資料によって得られた集団の構造を比較同定することによって、民族学資料における具体的事象を考古学資料によって得られた諸関係に置換すればよいのである。

ただ、上述した集団の構造は、「結合と分割」における集団の構造であり、全ての社会に通じるものである。したがって、民族学資料との比較において、その具体性は形態（住居址群の分布等）比較によってもたらされることになる。しかし、

単なる形態の比較が誤っていることは、鶴川J地点e群住居址と初山遺跡g群住居址が分布上異なっているのに対し、その住居址群諸関係における位置が同じであることから明らかである。

形態は構造の表現態としてあるが、構造が諸関係の分析態としてある一方、形態は結合体としてある。関係にとって両極に位置するのである。全ての事象の比較作業は、諸関係における位置、すなわち事象の関係性が問題となる。関係の比較作業においてもまた、諸関係における位置が問題となる。集団の構造は諸関係の関係として把握される。すなわち構造比較が必要とされる所以である。住居址分布から住居址群の単位を抽出し、住居址群の構造を分析する方法を「単位論」としたが、「単位論」は、単位間に分割軸を想定するものの、そこに関係の所在を求めない為に、集団の構造を分析することなく、したがって集団の諸関係を復原するにあたっては形態比較を行なうのが現状である。

このように、本稿において分析した集団の構造は、復原するにあたっては難点を持つものである。今後、その個別性と抽象性（考古学資料と民族学資料との比較作業に対して）をあわせ持つ構造を構築しなければならない。[6]

① 八幡一郎編著『貝の花貝塚』東京教育大学文学部史学方法論教室 一九七三年　なお、第一三図の貝の花遺跡住居址分布図において、縦線の住居址は中期後半Ⅰ期に、粗の斑点の住居址は中期後半Ⅱ期に、密の斑点の住居址は後期前半Ⅰ期に、白抜きの住居址は後期前半Ⅱ期に各々属する。編年は、前掲書によった。

② 関俊彦他『潮見台遺跡』一九七一年　住居址群は分布とその構成要素から二分割される。丹羽佑一「縄文時代中期の集団構造」『小林行雄先生退官記念論文集（仮称）』所収予定の論文にて分析した。

③ 空間分割の用語はクロード・レヴィ＝ストロース『構造人類学』生松敬三訳一九七二年　一四八―一七九頁によった。

④ 後藤守一「大湯町環状列石」『埋蔵文化財発掘調査報告』第二　一九五三年

⑤ A、B、C三関係による「結合と分割」の構造において、Aの関係における分割は、Bの関係における結合、Bの関係における分割は、Cの関係における結合に置換されるから、各関係に分割の意味を持たせると、この構造は、集団のAの関係が強くなるとBの関係が弱くなり、Cの関係が強くなること、またBの関係が強くなるとAの関係、Cの関係が弱くなることを示す。各集団の構造は、この構造を「尺度」にして比較される。したがって、資料は「尺度」に対応するものでなければならない。しかし、現実の資料が示す集団の構造が、「尺度」にあてはまるかどうかわからない。集団の構造と「尺度」の差異が、集団諸関係の矛盾として把握され、そこに集団構造の持つ問題点が指摘されよう。

⑥ 丹羽佑一注②にて試みた。

謝辞

小稿は、大学院演習の研究をもとにしたものであり、小林行雄、樋口隆康、小野山節三先生から有益な御指導と御教示をうけた。また、都出比呂志氏より参考になる御意見と、資料の収集において援助をいただいた。この小稿をまとめるにあたって、小林先生より文章表現から図版の作成に至るまで、有益な助言をいただいた。特に第一章の論述に関して適切な指摘をいただけたことを深く感謝しています。小稿が発表できたのは、考古学研究室の岡内三真、和田晴吾両氏の御協力によるものである。心から御礼申し上げます。

（京都大学大学院生　　）

Jane Addams: The Making of Her Reform Thought

by

Hiroshi Tsunematsu

Jane Addams who founded Hull House, a famous settlement house, in Chicago was one of the prominent progressives as well. She has been regarded as a precursory advocate of social welfare state. In the society dominated by laissez-faire ideology, how could she get such an idea? The purpose of this article is to make it clear that it was an only alternative for Jane, who tried to solve the problems raised by an industrial, urbanized and immigrant-crowded society.

Spatial Composition of the Settlements and Relation of the Groups in the Middle of *Jomon* 縄文 Period

by

Yuichi Niwa

There are two themes at present in the study of settlement-sites in *Jomon* period. One is a problem of social organization, that is what sorts of relations are among the groups of people and how these relations are united as a structure. The other is a problem of comparison of the social organizations, that is how one can compare the relations or structures in order to determine their localities and eras. Therefore, marks of the relations must be identified in archaeological materials before anything.

In this article, the author analyzes three settlement-sites in the middle of the period, assuming that the structures of division of the inhabited space would indicate the relations and their structures. Thus it is concluded that there exist at least three sorts of dividing axes, to which three sorts of relations may correspond. The structure which is abstracted from the aspects of 'division and unity' of the relations will be an effective standard when one compares the relations of groups in the sites of different areas and periods.